# 高増啓蔵(1901～1985) 雅号　高増径草

発表者：蔵本　則彦

左が高増啓蔵氏。
右は同じくろう者の天才書画の村上次郎氏

高増啓蔵略歴

明治34年(1901年)東京・木挽町(現東銀座)に生まれる。

３歳の時の事故が原因で徐々に聴力が弱まる。

大正４年(1915年)15歳の時、東京ろう学校に転校。

大正８年に高等科卒業後、同校師範科図画科へ入学。あわせて幼少頃より、画家を志し花鳥、風景、古画模写等に励む。水上泰生に師事。

大正12年(1923年)３月17日　日本美術院に入選。『小鳩』

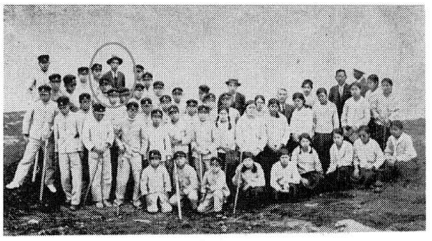
大正12年(1923年)３月

東京ろう学校師範科図画科を卒業。

大正13年(1924年)12月31日

国泰寺町にできたばかりの新校舎の広島県立盲唖学校(現・広島県立ろう学校)の美術教諭に任じられ、以来広島市に住居し、緑あふれる風物に惹かれ、山村風景を中心に創作活動を続ける。当時は、昭和９年11月に盲ろうの分割になるまで、盲ろうの生徒が一緒に学業を励んでおられました。

その他、主な出品

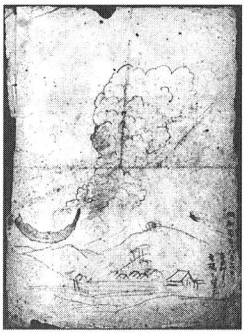


昭和６年５月　修　学　旅　行

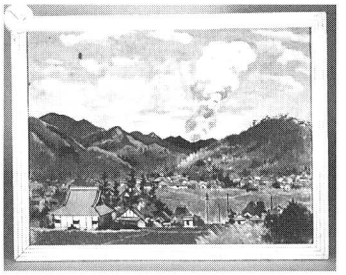
昭和20年(1945年)５月戦況激しさを増し、学校の集団疎開に伴って、90人の学童を引率して吉田町に移住する。自分の子どもも心配になって、一緒に疎開。

昭和20年(1945年)８月６日広島に原爆投下、吉田町からキノコ雲をスケッチ。８月６日当日広島から40km離れた吉田町から見た原子雲。

高増さんが２年間疎開生活を送ったお寺淨円寺



高増さんは、疎開したお寺で、大工さんと２人で便所の改造中だった。はじめは広島でなく近くで爆発したのかと思った。



長男：高増文雄さんの話

高増さんは、疎開する１年前に、妻のカメヨさん失っている。父子四人揃っての疎開も母親がいなかったためだという。「父子家庭にならなれば、一家そろって疎開はしなかったでしょう。母が命

にかえて私たち守ってくれたのだと思っています。」

昭和20年(1945年) 9月9日

9月9日、廃墟となった広島市内に入り、数日にわたり廃墟をスケッチする。

廃墟のスケッチ

一発の原子爆弾で廃墟となった広島の街で鉛筆を一心に振るう男性は、当時、県立広島ろう学校教諭だった高増啓蔵さん(当時45歳)。

遺族を探すと一緒にいた長男からの日記から、撮影日は1945年9月9日と分かった。米軍が撮影していた。

写真に見える八丁堀地区のスケッチをはじめ、原画十八点が残る。

米軍が撮影していた写真

これが、最も早い時期に描かれた「原爆の絵」だ。

米兵に見つかった時は、どうなるかと思った！！原爆投下後の1ヶ月後に、小学校5年生だった文雄さんも万が一の危険に備えて同行した。そこはまだ、犠牲者の遺体や毛髪がそこそこに残っていた。その中で、数多くのスケッチした。遺体を見ないようにした。

「弔う気持ちで描く人もいるが、私にはそれができなかった。」

米兵に写真を撮られたのは、橋本町の稲荷大橋の西詰で、中国新聞社の旧建物の方角をスケッチしていたときだ。上流の方から二人してやってきた。はじめは「しまった。」と思い、「覚悟した。」付き添いでそばにいたはずの息子の文雄さんも、すぐ逃げてどこかに行ってしまった。

「ところが案外、おとなしい男たちで、何事もなかった。一枚のスケッチを描き終えるまでの十分ぐらい、何枚が写真を撮られた。」その間、いろいろ話しかけられたが、何を言っているのか分からない。

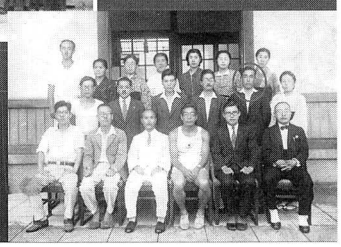
それでも身振り手振りで相手をし、出来あがったところで、スケッチを上にかざして見せると、それもパチリ。

昭和21年(1946年)

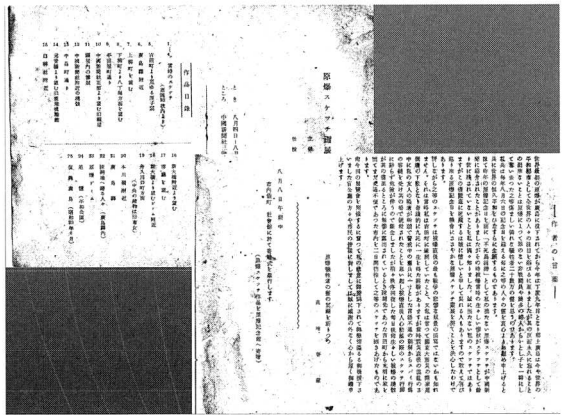
終戦の翌年、広島に引き上げるまで歴史と詩情あふれる吉田町の町並み、山々を一気に描きとめ

る。
昭和28年（1953年）９月
広島県ろうあ連盟の初代連盟長の大崎氏の辞任により、連盟長を昭和33年（1958年）まで就任。
※３代目は土肥氏

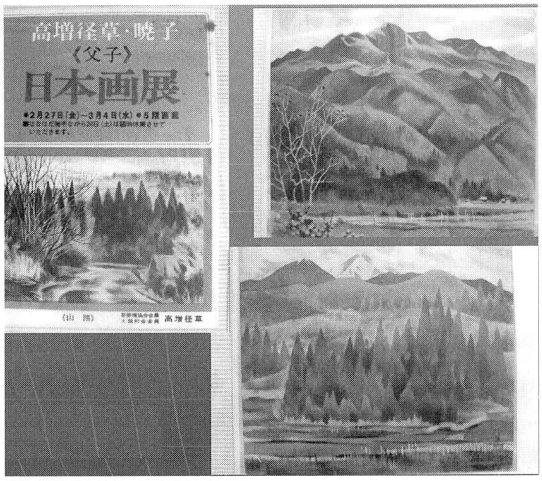
広島県ろうあ連盟長の時の１コマ
昭和31年（1956年）の尾道ろうあ協会講習会（高橋潔氏の講演）にて



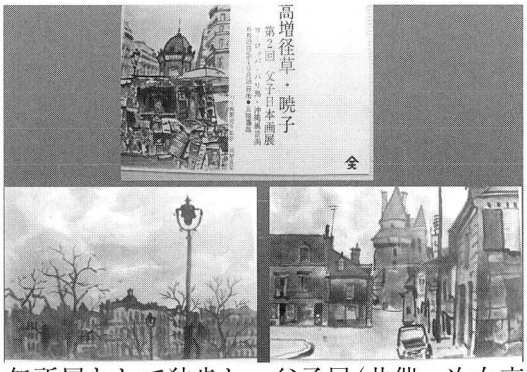
広島ろう学校教諭の時の１コマ
広島ろう学校教諭たちと



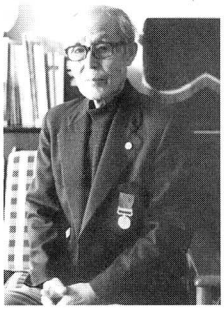
昭和29年（1954年）？
主催：広島県ろうあ連盟（後援：財団法人全日本ろうあ連盟他多数）による原爆スケッチ画展覧会を開催。その後、原爆スケッチを平和記念資料館へ寄附する。
昭和31年（1956年）４月30日
広島県立ろう学校の美術教諭を辞し、新美術協会、大調和会会員として専念する。以来、山形県をはじめ、各地にスケッチ旅行をし、その地その地の作品を多数描き残す。
さらに昭和44年からしばしば渡仏し、フランスの美術展にも出展。雅号も「其暁」から「径草」に改め無所属として独歩し個展、父子展（共催・次女高増暁子／現日展出品委嘱）で多数の紹介晩年に至る。
高増さんの主な個展昭和45年（1970年）
２月27日～３月４日の間、天満屋（福山）で第１回個展を開く。
昭和47年（1972年）
６月23日～28日の間、天満屋（福山）で第２回個展を開く。



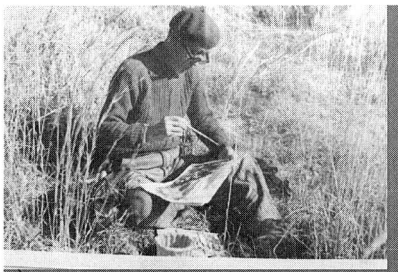

山形県をはじめ、各地にスケッチ旅行をし、その地その地の作品を多数描き残す。

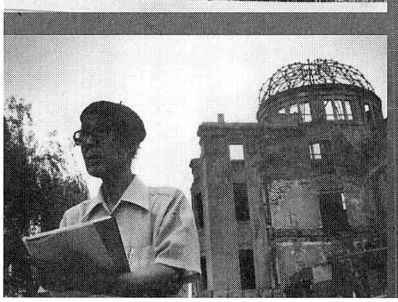


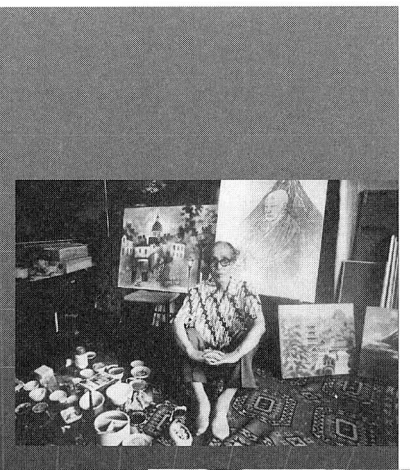

※次女暁子さまのスケッチと父子展
昭和49年（1974年）
絵画50年目を記念にして、天満屋（福山）で第３回個展を開く。

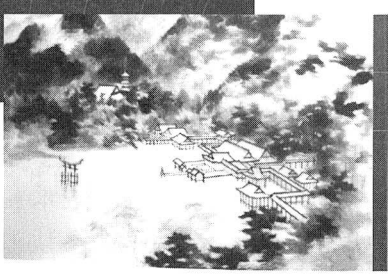


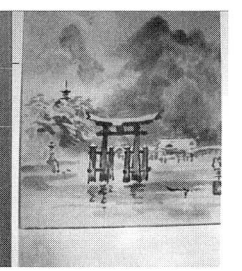
昭和44年からしばしば渡仏し、フランスの美術展にも出展。
雅号も「其暁」から「径草」に改め無所属として独歩し、父子展（共催・次女高増暁子／現日展出品委嘱）で多数











の作品を紹介 紺綬褒章を受章

平和記念資料館、吉田町、民俗資料館など、数多くのスケッチを寄附したことにより、総理府より紺綬褒章を受章

※紺綬褒章とは？

公益のために私財(500万円以上)を寄附した者を対象とする

昭和60年(1985年)

昭和56年に東京に移住後、84歳で没す。

昭和61年(1986年)

長年描き親しんだ宮島の大鳥居が望める小高い対岸に葬られる。

高増さんの後輩（伊藤政雄氏）から…。

関東大震災も遭った！同氏が、東京ろう学校に在学時に、関東大震災に遭い、同氏の友人は、同じく耳の不自由で口がきけない為、朝鮮人と間違えられて射殺されてしまった。あの有名な「朝鮮人暴動」という震災後の大混乱の中で、貴重なスケッチも描かれていた。

私の尊敬する先輩たち

## 高増啓蔵氏 (4)

今まで、故人の先輩を紹介していたが、健在中の先輩を紹介したいと思う。まず、広島県の高増啓蔵氏を紹介する。

同氏は東京の銀座に生まれ3才中耳炎の為失聰。東京聾唖学校高等科入学、同校師範科日本画科を大変優秀な成績で卒業。大正13年広島県立ろう学校の美術教員奉職。昭和30年代の初めに退職。現在、日本画家として元気で活躍中。年令80才。画家としての名は「高増恒草」。3人の子供、姉の歌子は広島県立ろう学校教員、増恒草」。3人の子供、姉の歌子は広島県立ろう学校教員、妹の暁子は日本画家、息子の文雄は東邦生命の太田記念美術館事務長。

高増氏は昭和20年敗戦悪の時、広島市から40キロ離れた吉田町に学校疎開と共に子供3人を連れて疎開していた。歴史上の大運命の日であるる8月6日の朝、広島市の方向の山の上の空に閃光を感じ、驚いて外へ出てみると、巨大なキノコ雲が流れ、爆風後の大混乱の中で、憲兵警察が日本語が話せない人なら朝鮮人とみなして射殺するという大変な非常事態があった。

広島に戻ったのは、一ケ月後の九月上旬。まだ犠牲者の遺体がたくさん転がっていた惨害風景をスケッチした。

スケッチは紙のなかった時代なので、学校で使っていた用紙のうらを使った。それらの貴重なスケッチを広島原爆資料館に寄贈した。そのうち四点は、今広島平和記念館に展示されている。この四点は被爆当時の惨害の様子のスケッチを下絵にして新しい作品を創作したものである。

同氏は80才の高令の身でありながら、原爆の恐しさをより多くの人々に知らせる為に今でも絵を描き続けている。

写真提供

高増文雄さま：高増啓蔵氏の長男

高増啓蔵氏のスケッチ写真、新聞の切抜など田丸歌子さま：高増啓蔵氏の長女高増啓蔵氏のスケッチ写真、新聞の切抜など

平和記念資料館

高増啓蔵氏の描いた廃墟の廣島のスケッチ

吉田町歴史民俗資料館

高増啓蔵氏の描いた吉田町のスケッチ